

講談を“もっと”知ろう！

<講談のルーツって？>

さまざまな説がありますが、講談師の祖、といわれているのは、赤松法印（あかまつほういん）です。赤松法印は、徳川家康に対して、『源平盛衰記（げんぺいせいすいき）』や『太平記（たいへいき）』などの軍記物（ぐんきもの）とよばれる合戦を題材とした物語を読み聞かせたとされています。このように講談は、本を読み聞かせることから発生した話芸なので、「語る」のではなく、「読む」と表現されます。

<講談師ってどうしたらなれるの？>

現在の講談師には、前座（ぜんざ）→二つ目（ふたつめ）→真打（しんうち）という修行の過程があり、真打になるまでには15年前後の修行が必要です。

<稽古「修羅場読み（しらばよみ）」ってなに？>

講談師が、入門後に最初に稽古するのは、修羅場読み（しらばよみ）です。軍記物の一節を貼り扇（はりおうぎ）を盛んに使用し、講談独特の口調とリズムで読んでいきます。読まれる言葉は難解ですが、聴衆はその独特のリズムに引き付けられます。配信されます「講談とは？」でも、その一部分をお聞きいただくことができます。

<引き事（ひきごと）ってなに？>

講談の作品の多くは、江戸時代から明治時代に作られて、現代まで受け継がれたとされています。これらの作品を作られた当時のままに読んでは、なかなか現代の聴取に魅力は伝わりません。そこで、作品の中に読み手である講談師本人の体験や考えを所々に入れ込むことで、少しでも分かりやすくしたり、テンポの変化をつけたりします。こうした工夫を引き事と称します。引き事には、講談師の個性が表れるため、同じ作品を講談師ごとに聴き比べる楽しみにもつながります。

